

女子水泳部員が男子部員の前で全裸になる試練

五月の終わりのプールサイドは、青葉高校水泳部の部員たちにとって、先週の衝撃的な「メンタル試練」の記憶がまだ色濃く残る場所だった。新入生男子たちが女子部員とマネージャーの前に全裸を晒し、羞恥に耐えたあの日の出来事は、部員たちの間に複雑な感情を植え付けていた。練習の合間、女子たちはプールサイドのベンチに集まり、男子たちをチラチラ見ながら、くすくすと笑い合っていた。

二年生の松本梅歌は、低身長で平らな胸を競泳水着に包み、ショートカットの黒髪を揺らしながら、意地悪く笑う。「ねえ、佐藤くんのあのちっちゃいおちんちん、覚えてる？ほんと子供みたいだったよね！」彼女

の声に、一年生のマネージャー、佐々木芽衣が顔を赤らめ、「梅歌先輩、ひどい...でも、ほんと小さかった...」と呟く。芽衣のセミロングの茶髪が、恥ずかしそうに揺れる。

三年生の中村玲奈は、モデル並みの長身と引き締まった体を競泳水着で際立たせ、冷たく言う。「田中のはまあまあだったけど、鈴木のはなんて笑えるくらい縮こまってたわ。情けないったらありやしない。」彼女の長い黒髪が、風に揺れる。二年生の美咲は、「ほんと、みんなガチガチに緊張してて、めっちゃ可愛かったよね！」と笑い、三年生の葵は、「でも、ちょっと可哀想だったかな...」と少し同情するように呟く。一年生の梨花は顔を赤らめ、「あんなの...見ちゃったこと、忘れられない...」と呟く。マネージャーの沙織、由紀、愛美、彩乃も、笑いながら男子たちの股間を話題にし、からかっていた。

男子たちは離れた場所でストレッチをしながら、女子たちの声を聞き、顔を赤らめていた。佐藤悠斗は、「くそ、いつまでも言われ続けるのかよ...」と呟き、田中翔は、「あの時の視線、忘れねえからな」と唇を噛む。鈴木健太は、「もう...恥ずかしすぎる...」と肩を震わせ、山本大輔や岡田直樹も、「あの試練、トラウマだぜ」と囁き合う。彼らの心には、女子たちの視線に晒された羞恥と屈辱が深く刻まれていた。

そんな中、顧問の山田先生が部員たちをプールサイドに集合させた。彼の声はいつも以上に重く、威圧感に満ちている。「お前たち、先週の試練はよくやった。だが、時代は変わった。ジェンダー平等が叫ばれる今、男子だけにメンタル試練を課すのは時代錯誤だという声が上がっている。そこで、今日、新たな試練を行う。女子部員と女子マネージャー、全員が参加だ。」

女子たちの間に、凍りつくような沈黙が広がった。総勢十人。部員の梨花、梅歌、玲奈、美咲、葵と、マネージャーの芽衣、沙織、由紀、愛美、彩乃。彼女たちの顔には、不安と疑惑が浮かぶ。男子たちは一瞬驚いた後、ニヤリと笑い合い、復讐の予感に胸を高鳴らせた。

山田先生が続ける。「試練の内容はこうだ。女子は一人ずつ、プールサイドの中央に出て、全ての衣類を脱ぎ、全裸になる。そして、男子部員たちの前で一分間、直立不動で立つ。これを一年生から三年生まで、全員が行う。試練が終わるまで、水着やジャージの着用は一切許されない。分かったな？」

プールサイドが一瞬静まり返り、すぐに女子たちの悲鳴と抗議が爆発した。

「うそ！何！？絶対無理です！」梨花が、顔を真っ白にして叫んだ。彼女は身長150センチの小柄な体を競泳水着に包み、

ショートカットの黒髪が震える。「なんで私たちがそんな恥ずかしいこと...！」

「ふざけないでください！こんなのありえない！」梅歌が、低い声で怒りを爆発させた。身長145センチの彼女は、平らな胸を競泳水着で隠し、華奢な体が怒りで震える。「男子だけだったのに、なんで急に私たちまで！？」

「こんなのセクハラです！訴えます！」玲奈が、鋭い目で先生を睨んだ。身長165センチの彼女は、長い黒髪とモデル並みのスタイルを競泳水着で際立たせ、普段の冷静さが崩れるほどの動揺を見せる。「ジェンダー平等って、こんな屈辱的なことじゃない！」

「絶対嫌です！こんなの耐えられない！」由紀が、ジャージの袖を握りしめて叫んだ。身長158センチ、セミロングの茶髪をポニーテールにした彼女は、眼鏡の奥の目が恐怖で揺れる。「こんな試練、意味ないです！」

芽衣は顔を両手で覆い、「こんなの...死にたい...」と呟き、美咲は「冗談でしょ！？ありえないよ！」と叫び、葵は「こんなの...私のプライドが...」と肩を震わせた。沙織は「こんなの、最悪...」と呟き、愛美は「お願い、やめて...」と泣き出し、彩乃は「こんなの、頭おかしいよ！」と叫んだ。女子たちの声は、恐怖、怒り、絶望に満ちていた。

だが、山田先生の声は氷のように冷たかった。「静かにしろ！これはメンタルを鍛える試練だ。男子だってやった。平等にやるのが筋だ。嫌なら今すぐ退部しろ！」彼の声は雷のように響き、女子たちの抗議を一蹴した。プールサイドに重い沈黙が落ちる。女子たちの目には、諦めと絶望が浮かんでいた。梨花は涙をこぼし、梅歌は歯を食いしばり、玲奈は唇を噛み、芽衣は肩を震わせた。

一方、男子たちは歓喜に沸いていた。先週、女子たちの視線に晒され、嘲笑された

屈辱が脳裏をよぎる。悠斗はニヤリと笑い、「やっと仕返しの時だ！ がっつり見るぞ！」と叫ぶ。翔は目を輝かせ、「あの時の仇、取ってやる」と囁く。健太は顔を赤らめながら、「こんなの...やばい...見ちゃう...」と呟く。大輔は、「今度こそ、目に焼き付けてやるぜ」と笑い、直樹は、「復讐の時間だな」と呟く。彼らの視線は、女子たちに突き刺さり、復讐の炎が燃え上がっていた。

最初に名を呼ばれたのは、一年生の梨花だった。「高橋梨花、前へ！」山田先生の声が響く。梨花の顔は真っ白になり、膝がガクガクと震えた。彼女は小柄で、競泳水着が華奢な体に張り付き、胸は控えめで、腰は細い。ショートカットの黒髪が、緊張で汗に濡れている。彼女は中央に進み、涙目で周囲を見渡した。「お願い...やめて...こんなの無理...」と呟くが、先生の「脱げ！」という声に逆らえない。